

## 第 10 回 檜の若木賞受賞に寄せて

伊藤 万桜

私は、檜の芽会奨学生として2017年3月に東京音楽大学を卒業後、同大学大学院音楽研究科に2年間に在籍して、引き続き主任教授と客員教授から直接ご指導を頂く幸運に恵まれました。そして巣立つ半年前の2018年夏、若さゆえの恐いもの知らずの勢いだったのですが、日本のトップクラスの演奏家や演奏団体からなる日本演奏連盟がオーディションを行う「文化庁平成30年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業、新進演奏家育成プロジェクト リサイタルシリーズ」に応募してみたいと思いついたのです。

東京、京都、大阪地区にてオーディションにより出演者を選抜し、文化庁と日本演奏連盟の共催による演奏会はこれを機に本格的演奏活動をしようとする方のデビューリサイタルの位置付けであり、後から知るのですが、新進演奏家としているものの、応募者は既にプロオケメンバーや、文化庁支援の海外留学凱旋の方が多く年齢も私より上の方が応募されているものだったのです。

さあ、大変！ そういう方々とオーディションの土俵に上がるので、教授にご相談しアドバイスを頂きながら、第1次の書類選考のため音楽履歴書作成、リサイタルプログラム作成（第1部第2部それぞれ40～45分）に夢中で取りかかりました。履歴書はもちろん、プログラムの内容・組み方なども審査対象となります。いかに難易度の高い意欲的なプログラムが組めるか（合格したら同じ内容でリサイタルを行うことが前提）です。

私のプログラムは、第1部モーツァルト：ヴァイオリン・ソナタ第18番、ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ第3番。第2部ヴィエニャフスキ：グノーの「ファウスト」の主題による華麗なる幻想曲、リヒャルト・シュトラウス：ヴァイオリン・ソナタとしました。

企画意図としては、ドイツ・ロマン派にみるヴァイオリン・ソナタ形式の確立の検証を中心に置いて、情緒豊かなヴァイオリン曲をモチーフに取り上げて、特有の音色・技巧を駆使した、聴衆を惹き付ける正統派ロマン主義の演奏に挑みたいということ。また、自分のドイツ・フランス・イタリアでの演奏体験をベースに、現代の日本でも演奏会で多く取り上げられるロマン派に焦点を当てて、25才のマイルストーンとなる演奏会にしたいということを記載しました。また、自身の集客見込み（ピクマウスで200名！！）や集客への意欲も記入しました。両教授の推薦も得て、こうして1次書類審査を通過し、2次の実技審査へ。

大学から7年間に渡り試験ははじめ多数の伴奏をお願いしてきた東京音楽大学弦楽科講師（当時は東京藝術大学弦楽科助手兼任）のピアニストの先生に実技審査に選んだ曲、ファウスト幻想曲の伴奏もお願いしました。お陰で難易度の高い曲を音楽的に自分の物として楽しんで弾くことが出来、オーディション合格となりました。大学の試験とは別物の緊張感とストレスでした。ここから、約1年後2019年10月2日リサイタル



への準備が始まります。

コンセプトとプログラムは出来ている、会場と広報宣伝は主催側が引き受けて下さるという最高のシチュエーションの中、自分は演奏のみに集中したらよいという甘い考えはすぐに吹き飛びました。まず、ポスターなどの写真、後援依頼、HPや印刷物への寄稿、チラシ原稿案、衣装、協力スタッフ依頼、招待や案内のリストアップ、200人といた手前の自力の集客等々が押し寄せてきました。

会場となる東京文化会館は日本のクラシック演奏会場の名門で60年の歴史ある場所、小ホールとはいえ649席もあるのです。そして、私は東京文化会館ロビーに大きな自分のポスターが貼られたのを見に行く余裕もないほど、「演奏と集客」の大きなプレッシャーと共に課題に取り組んでいました。

「集客」無名の新人のリサイタルに足を運んで頂くにはどうしたらよいか。主催側でも雑誌2つとHP掲載やご招待はありましたが、加えてできる限りのPRを考え実行したことが良い勉強になりました。私側としては年賀状データよりDMの発送、LINEやメールでのご案内をしていく中、応援して下さる方々も得て、情報の拡散を願う日々が続きますが、自分のサイトだけでは限界を感じていたところ、知人からOTTAVAラジオとFMしながら出演の機会を頂きました。また、新聞の音楽会案内欄やネットの複数のサイトへの投稿、SNSももちろんフル活用しました。一番手堅かったのはやはり友人知人へのDMからのお申込で、小中学時代の友人に久しぶりに連絡を取ったり、親類縁者に家族総出でご案内したりしました。

「演奏」ヴァイオリン・ソナタの形式は、モーツァルトの頃から動き出し、ヴァイオリンがこれまでのピアノの伴奏程度の役割から、キラリと光る存在になっていきます。ロマン派の時代の中で、多くの有名ヴァイオリニストによりヴァイオリン名曲が作曲されていき、ヴァイオリンの器楽での位置が不動のものとなります。ブラームスもヨアヒムという高名ヴァイオリニストの友によりヴァイオリン曲にはまっています。ヴィエニヤフスキは自身がヴァイオリニストなので、これでもかという位に超絶技巧と弦の魅力を追究した作品を多く生涯に遺します。古典派の音楽家は作曲数が多いですが、ロマン派になるとじっくり吟味して世に出してくるようになり（ブラームスはその典型で自ら破棄した未発表作多数）、歌曲で有名なりヒヤルト・シュトラウスのヴァイオリン・ソナタは唯一のものです。彼が私と同じ位の歳に作曲したこのソナタは若いエネルギーと華やかな技巧に彩られた、でも難曲（下手をするとピアノに負ける部分がある）ゆえ



リサイタルのチラシ



開演前のホール内

に、演奏機会が少なく知名度は低いのですが、この曲をいつか弾きたいと思っていたので、この大きな舞台で披露できる嬉しさといったら最高です。

そして、あっという間に「文化庁/日本演奏連盟主催 新進演奏家育成プロジェクト リサイタル・シリーズ TOKYO086 伊藤万桜 ヴァイオリン・リサイタル-弦のロマンと25歳のマイルストーン」の当日となり、結果は、315名様をお迎えして大きなたくさんの拍手とプラーボがこだまして大成功のうちに終演となりました。主催側からも予想以上のご来場者で、特に当日券も多く出たとのこと、受付前には長蛇の列だったとのこととお褒めのお言葉を頂戴し、ホワイエでは教授にお声かけ頂き、堪えていた涙がポロポロ溢れてきました。余り知られていない曲でお客様を魅了できた! やった! 私の中に「確信」が芽生えたのです。

この自信を持って2020年は飛躍の年と思っていた矢先にコロナ禍です。20あまりの演奏会が次々とキャンセルとなり、先の目処も立ちません。3～5月は外出も出来ず(気力もかなり落ち込んでいた)、キャンセル返金と給付金の申請に追われていました。こんなに本番がなかったのは、振り返るとこの10年で初めてのこと。夏位から配信などもやらせて頂いていますがやはり生音を届けたい、ホールで弾きたい、鬱々とした中にいました。

そんな時だったのです。檜の芽生様より檜の若木賞受賞の知らせが届いたのは、真つ暗闇の中でその光の威力は絶大で、頑張れと背中を押される思いでした。受賞理由の2019年リサイタルは随分遠く感じられましたが改めてその時の感動を思い起こさせて下さいました。本当に感謝申し上げます。気持ちをアップできたお陰で、令和2年度文化庁文化芸術活動の継続支援事業として、2020年10月に再びリサイタル開催(自主開催)の運びとなりました。今の色々な思いを込めて舞台に立ちたいと思っています。

#### 【ご案内】

2021年2月20日(土)14時開演 東京オペラシティリサイタルホールにて「伊藤万桜リサイタル2021」開催予定です。ご来場お待ちしております。 <https://maoito.info>

(No.4303 ヴァイオリニスト)



モーツァルト演奏



お祝いの花に囲まれて終演後